

## チェルシー日記・抄-絵画をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2009-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内村, 和至 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/3575">http://hdl.handle.net/10291/3575</a>

## チエルシー日記・抄

—— 絵画をめぐって ——

この夏から秋にかけて、短期在外研究でロンドンのチエルシーに三ヶ月を過ごした。もともと出不精の怠け者で、今更珍しい見聞があるはずもない。ただ、自分でも思いがけなかったが、ナショナル・ギャラリーで私の中に絵画への愛着が強く蘇ってきた。高校生の頃、私は美大をめざしてせつせと石膏デッサンに励んでいたのである。観光名所らしい所にはあまり行かなかったが、ギャラリーをめぐっては、その印象を日記に書いた。ここにその抜粋を記し留めておくのも、そんな懐旧の情に駆られてのことである。

### 内 村 和 至

×月×日

九時半頃にフラットを出て、バッキンガム宮殿まで歩く。少し見物してから、セント・ジェームズパークへ。鴨や雁が人なつくくエサ待ち顔をしている。英国式庭園は野趣があつてよいものだ。

ウエストミンスター寺院とビッグベンを眺めてからトラファルガー広場へ。ビッグベンは思っていたよりズングリムックリしていて大きかった。何がなし感心した。ナショナル・ギャラリー！ とんでもない所である。

今日は数点と決め、心を鎮めてベラスケス室に。画家の中の画家ベラスケス。何という冷徹なりリズム。しかし、ここには、その最高、最上と言えるまでの作はない。

むしろ安心する。まだ先がある。

レンブランド室。レンブランド六三歳、死の年の自画像の前でしばらく動けなかった。こちらを見て「お若い、お前さんはなんで生きてるんだね」と問いかけてくる。これほど絵に人間を感じたことはない。これが西欧絵画の到達した最高のヒューマニズムである。茫然として部屋を出る。

しかし、しかし、フェルメールがあった。「ヴァージナルのそばに立つ少女」。わざとらしく気取ったポーズで、ヴァージナルに手を置く若い女。何か欺瞞的で微妙に淫靡な雰囲気がこの絵にはある。ただ、その室内の、その輝き、その光の雫。何という至福であろう。本物のフェルメール！ 今にも手をヴァージナルから持ち上げて、ポーズはもういいでしょう？と言いたい。

それから、レオナルド室へ。ここの「岩窟の聖母」はあまりよくない。大幅な後人の加筆がある。しかし、聖アンナのカルトン！この神秘！この謎！レオナルド、レオナルド！ 退色保護用の薄暗い部屋で、ずっと見つめていた。レンブランドが見る人に問いかけるとすれば、レオナルドは謎を投げかける。それが何の謎なのか、誰も知らない謎を。なぜ私はこれに見入っているのだろうか

か？ レオナルドの絵は、見入る人に見入ることの尽きせぬ謎を繰り返させる。なぜだ？なぜ見る？と。この反復する謎のために、ロンドン滞在中、ここには何度も来るだろう。

×月×日

郵便局に寄ってから、地下鉄でピカデリーサーカスに行く。エロスの像のところで、酔った若者が昼日中殴り合っていた。御苦労なことである。

ナショナルギャラリー。今日は、ファン・アイクとホルバインのつもりだった。中に入ったが、やはりレオナルド室へ足が向く。カルトンの部屋でじっと座っているとその時のタイミングで一人だけになることがある。しばらくレオナルドを独り占めにできるのである。こんなことがありうるとは思っても見なかった。いつまでも座っていられる。レオナルドが描いた下絵が実際に存在し、それが五百年を超えて私の目の当たりにある。不思議としか言いようがない。ナショナルギャラリーの最も重要な作品はこれに留めを刺すであろう。

ホルバインの「アンバサダーズ」は、すごいと言ってよい。しかし、「メモント・モリ（死を思え）」の頭蓋骨

がトロンプイユ（眼だまし絵）で描き込まれた、この絵は、ホルバインの卓越した技術を示しはするが、逆にその技術が目立ちすぎるのではないだろうか。私はこの作品を、実はそれほど好きではない。「エラスムス像」はあまりよくない。別の横顔を描いた作の方がもっとよい。オランダ顔なのだろう、グスタフ・レオンハルトにそっくりである。その横に「リスと椋鳥のいる夫人像」が置かれている。これは本当に素晴らしい作品だ。何という描写力。ホルバインは、おそらくカラヤンやホロヴィッツやカール・ラガーフェルドのような人だったのだろう。悪達者スレスレのところ、何でもできてしまうのである。精神的なものはほとんどないのだが、その天性の感覚がほとんど精神そのものと見まがうまでに高まっている。世俗的な成功を保持しつつ、ここまで届くのだ。これほど強靱な絵は見ることがない。

ファン・アイク「アルノルフ・ニ夫妻像」。ホルバインの遠近法的奥行きは意外に浅いのだが、この絵は、正しい遠近法ではないにもかかわらず、あるいはそれ故に、遠い先まで奥がある。見る者はまるで宇宙船の窓からこの光景を眺めているようだ。それは異なる惑星での出来事のように見える。この神秘的でアレゴリカルな夫妻像

は、北方ルネサンスの精華である。ホイジンガは、この絵のために『中世の秋』を書いたのである。何かはわからないが、ここには深い精神が感じられる。それは宗教的と言うのとは少し違う、よりフリーメイソンの神秘的主義である。このアレゴリカルな絵をわかるのは難しいし、わからうとすることが正しいことかどうかもわからない。しかし、見る者の心を捉えて離さない絵である。

思いがけず、ブリュッゲルに出会う。「東方三博士の礼拝」。これがここにあるとは知らなかった。あまり気付かれないのか、立ち止まる人も少ない。輝かしい色彩。ブリュッゲルは本当に美しい。その空間の奥行き。焦点の深さが見るものを画面の中に引き入れてしまう。つまり、その場に立ち会っているような感覚にとらわれる。しかし、これも遠近法的正確さとは別なのである。ずっと以前に見た「説教するヨハネ」を思い出した。それでも私はヨハネの説教を聞く群衆の一人になっていた。今日見たフランドル絵画の巨匠達に比べれば、同じフランドルでもレンブラントは極めて人間くさい。生臭いとすら言える。ここには「人間」という観念が見事に絵画に受肉しているのだが、「我々はここから墮落の道を進んで来たのではないか」という思いも湧く。無論、レ

ンブランドが墮落しているわけではない。個人の内面がもうありえない時代にあつて、我々は哀れにもレンブランドの内面あるいはヒューマニティーに全面的な信頼を置くことができなくなっているのである。

×月×日

少々早かったが、九時過ぎに出る。まずテムズ河畔に出で、河沿いに歩く。立派な河である。ホームズが『四つの署名』でランチを駆ったのはどのあたりだろう、などと想像する。ジョガー以外に人もいない。テート・ブリテンには少し早く着いたので、開館を待つて入る。有料がブリジット・ライリー展である。昔、大回顧展を見た。今更見る気はしない。

期待のフランシス・ベーコンは一点だけだった。しかし、素晴らしい作品である。サザランドが何点かある。悪くもないが、横綱は張れない。テート・ブリテンでは、ターナー、ターナーと有り難がつているが、所詮は田舎者のマイナー作家である。御当地物としてはスタップスなどよりは数等でしたが、それでも大した物ではない。イギリス人は愛国心に富んだ国民である。

バーバラ・ヘップワース、リン・チャドウィック、ベ

ン・ニコルソンなどがあるのも御当地である。ナウム・ガボ、ペヴスナーなどは少し珍しい。しかし、ヘンリー・ムーアがあまりないのはどうしてだろう。今回の展示はハズレらしい。客足が少ないのも当然である。テート・モダンに期待しよう。

帰り道、ピムリコウで少し道に迷って、小さな公園に出ると、野菜や肉や魚の小さな市をやっている。焼いたソーセージをパンに挟んで売っているのがおいしそうに見えた。漫然と歩いて見覚えのある通りに出た。今度、また来てみよう。

×月×日

ナショナルギャラリー。

フェルメールは画中の人物に冷たい。というか、それは家具やヴァージナルや額縁やらと同列なのである。カメラ・オブスキュラを使って描いたとされるフェルメールの作品は、一瞬の永遠を固定する。写真に対するこの情熱は、写実主義というイイズムではない。フェルメールの作品に感じられる、ある種の冷たさとかすかなエロティシズムは、作者の写実に対する情熱の在りかを物語っている。つまり、フェルメールは対象を見つめすぎるほど

見つめるのだが、それはその対象を理解したいからではないのだ。フェルメールの魅惑的な空虚感、この対象への非情によるのである。そのため、フェルメールは人を強く引き付けるが、最後は突っ放してしまふ。見る者はあえぐようにしてそれを追いかける。即ち、フェルメールからは立ち去りがたい。誰かが言ったように、絵の前から立ち去りたいとは、絵が下す「立ち去れ」という命令である。見ることは、この立ち去りゆく時間そのものである。私がフェルメールに見入るのは、まさに私が立ち去りゆく者だからにほかならない。フェルメールの絵画が告げ知らせるのは、おそらく、そのことなのである。

\* \*

ここにはパルミジャーニノがかなり多くある。これだけまとめ見るのは初めてである。知的なくせに得体の知れない熱狂が感じられる。このマネリスムの作者は謎めいた微熱を発している。「理性というものは心が想像できないような情熱を持っているものだ」。これはパスキアの反転だが、私は以前この手製のマクシムを、マネリスムの定義としてはかなりいい線を行っている、と内心自負していた。後に、エウヘニオ・ドールスが

『プラド美術館の三時間』でバロック芸術について同じ事を言っているのを知って、ちょっとがっかりしたことがある。しかし、この定義はバロキスムよりもマネリスムにこそふさわしい。このマクシムは、パルミジャーニノやポントルモのために考えたものだった。

ナショナルギャラリーには、イギリスのマイナー画家の作品が入り交じって置かれている。御当地だけに仕方もないが、スタップスの馬の絵など、こんなところには並ぶべきものではない。「国辱物」である。

×月×日

一一時過ぎに出発。ブラックフライヤーズ橋を渡ってテート・モダンへ。ムーアのアフロアがある。やはりこっちだった。しかし、展示点数はそれほどでもない。

サイ・トゥオンブリーなどまとめて見るのは初めてだが、大して感心しない。ピカソの気楽に書かれた大雑把なヌードが非常によい。背景色のオークルジョンヌをなんでこう、いい加減且つ面白く塗れるのであろう。ピカソの「泣く女」。名作には違いない。で、今となってはまとまりすぎではないだろうかとも思う。

モリ・マリコのヴィデオが流れている。身内のヘマを

見ているようで気恥ずかしい。日本人作家なら高松次郎とか菅木志雄とかの作品も入れてもらいたいものだ。

デュシャンの大ガラスのレブリカがある。本物より綺麗すぎるという噂だが、確かにサッパリしすぎの感じである。それでも感心した。あの時代にこういう作品を構想しえたデュシャンにである。デュシャンの過去の作品を箱入りにした、例のミクストメディアもあった。あとは、「メートル原器」や「遺作の断片」など。

マン・レイもある。相変わらず洒落たものである。目玉のついたメトロノームは、「泣く女」のモデルだったドラ・マールの目のように見える。ドラの写真もマン・レイは撮っていたはずだ。

ヨーゼフ・ボイスの巨大な作品に感心する。何が何だというわけでもないが、ボイスは凄味がある。しかし、これは反転したナチズムのようなものだ。ナチス的スカトロジミみたいな気もする。あまり感心するのは考え物である。アンゼム・キーファーも同様。コワモテしすぎではないかと思う。

マックス・エルンストの最後の妻でもあったドロテア・タニングが何点かあるのが珍しかった。ジャコメッティの素晴らしい彫刻がある。未来派のウンベルト・ボッチョー

ニがある。かと思えば、シミュレーションニストのジェフ・クーンズもある。カール・アンドレのインスタレーションもある。あれもある、これもあるで、めまぐるしい。

キュレイターの見識でテーマ別展示にしているのだから、やや散漫な印象は否めない。実は作品がありすぎて並べるのに困っているのかもしれない。とにかく、アレコレ見させられてヘトヘトになった。今日はもう結構帰ろう。

八時過ぎ、夕食を作る。コッド（タラ）のフライは出来物だが、なかなかいける。あとは、グリーンサラダとチャーハン。デザートにリングとラズベリー。ワインはソアヴェ。

×月×日

サンドイッチと水を買ってハイドパークまで行く。たまたまホースガーズが騎馬行列していくのを見る。

野草に触ったり、木の幹を撫でてみたりしながら、サーペンタイン池を一巡りする。橋を渡ったところで、サーペンタイン・ギャラリーというのを見つけた。シンディー・シャーマン展をやっている。

小さなギャラリーだが、なかなかよい。こんなところ

でシンディー・シャーマンを見るのも巡り合わせである。「アートはビジネスである、シンディーは素晴らしい商品を作っている」。そんな感想が沸く。シンディーは後世に残る作家だろう。なぜだか理由は説明できないが、そう思う。作品の構えが正統派でひねっていない。佇まいが毅然としている。

ギャラリー併設のブックショップが思いの外充実していた。新古本コーナーでは、M・デュシャンのカタログレゾネやM・エルンストの画集など投げ売りのような値が付いている。買いたい、しかし、先は長い。自重々々。

×月×日

ナショナルギャラリーに出かける。セインツペリ・ウイングから入り、聖アンナカルトンへ。

聖アンナの顔はなぜあれほど謎めているのだろうか。微笑を浮かべてはいるが、それはマリアの宿命への憐憫のまなざしのようなものもある。マリアに比べて、アンナの顔は描き込まれて色調が暗くなっている。レオナルドはそれだけ、アンナにこだわったのである。アンナはどこか別の空間からマリアをのぞいているようにも見える。それがこのカルトンをアンナのものにしているのである。

これはマリアが主題なのではない。このマリアは、ラファエロのように単純に美しい。アンナはレオナルドの絵画に対する問いかけの具現であるかのようだ。「お前はなぜこんなにまで消耗して仕事をするのか、哀れなレオナルドよ」(『ダ・ヴィンチの手記』)。レオナルドが自らにそう問いかけたように、このアンナは、なぜ描く?なぜ見る?という画家の自問なのかもしれない。

今日はボツシュがよかった。「嘲弄されるキリスト」。輝くような美しさだった。あたりまえだが、やはり並の画家ではない。

ピエロ・デラ・フランチェスカを少し丁寧にみる。純朴であり、高貴であり、洗練されている。マンテーニャはまだ全く手つかずである。上野の西洋美術館に小さいが素晴らしいマンテーニャがある。それを見て以来、マンテーニャには何となく畏敬の念を感じるの、うかつには見られない。

帰りがけに、フェルメールの「ヴァージナルの前に座る少女」を見る。多分、部屋全体に染みこむような光がないと、フェルメールのカメラ・オブスキュラの手法は塗り絵的になるのではなからうか。少女のドレスのトップライトはやや平板である。つまり、塗り絵的である。



光がドレスの質感からやや遊離している感じがする。それは、この部屋が翳りすぎだからなのだろう。しかし、いささか空虚な表情を浮かべた少女の顔は美しい。うっとりするといいような気がする。

×月×日

熱波襲来で昨夜はオーナーのヘレン（カリビアンの美しい女性）が扇風機を持ってきてくれた。それでも、東京に比べればまだしのぎやすい。

今日はナショナル・ポートレートギャラリーに入ってみる。ここにあるのかと思ったのは、パーセルと、「ロンドンのバッハ」ことクリスチャン・バッハの肖像。現物ではウォーホールとギルバート&ジョージの作が目立った。やはり、作者の力量というのは隠せないものである。イギリス人の肖像コレクションだけに、サー・ポール・スミスやサー・ポール・マッカートニーなどがある。なんだかおかしい気もする。しかし、いつもお世話になっているポール・スミスの悪口は言えない。小一時間いて、ナショナルギャラリーへ移動。今日は近代を見た。

セザンヌの小さな自画像に感動する。これは極めて明確な絵画思考に裏打ちされた作品である。ほとんど科学

的と言ってよい。にもかかわらず、全く生き生きしている。絵画というものに対するアプローチをセザンヌは決定的に現代的なものにしたのだと思う。ところが、初期作品はなんとゴテゴテ塗りたくっているのだろうと感じる。ここからセザンヌが絵画の科学的探求に向った径路がよく飲み込めない。そのためだろう、「大水浴」シリーズは実のところよくわからないのだ。セザンヌが何を考えようとしていたのか、つかまえる糸口がない。エクサン・プロバンス風景や自画像は、何となくセザンヌが考えていたことがわかる。それはカルテジアンな態度と違っていいくらいだ。しかし、「大水浴」の画面には、初期作品に孕まれた情念が影を落としているらしい。それが何であるか把握できないために、「大水浴」は私の理解を妨げるのだ。しかし、言うまでもなく、ここにはセザンヌの絵画にとって何か重大なものがあるのである。おそらく私はそれを理解できるまでには至らないだろうと思う。また、それが理解できなくても仕方がないだろうとも思う。

ドガのパステル、「体を拭く女」に驚嘆する。髪を拭いている左腕の上腕三頭筋はばやけていて輪郭がない。そのため、あたかも髪を拭きながら腕が動いているかのよ

うに見える。漫画の流線の効果に近い。しかし、何よりも身をかすかによじた女の左肩から背中にかけての脊柱起立筋のラインが素晴らしい。この線があるからこそ、この女は体を拭けるのである。

ゴッホは「プロバンス風景」が素晴らしかった。光が内側から照り輝いている。太陽光ではない。雲や糸杉や麦畑そのものが光を発しているのである。それは事物の発する強烈な燐光なのだが、日盛りと拮抗して陽光と區別がつかないのだ。確かにこいつは気が触れている。例の「ゴッホの椅子」や「ひまわり」は意外につまらない。余計な解説や伝説がくっつきすぎていて、虚心に見られないせいだろう。こういう作品とは何度も付き合わないといけないのである。

夕方、ロンドン旅行中の妹と待ち合わせ、その友人と三人で夕食。そのあと、一緒にストランドのヴォードヴィルシアターでミュージカル「ストンプ」を見る。アフリカ音楽とミニマルミュージックとマクドナルド的アメリカ文化の混合とでも言うべきか。エンターテイメントとしてよくできていて楽しめた。

×月×日

チームズ対岸にある解体中の火力発電所の写真を撮りに行く。散歩の折に気になったのである。同じような考えの奴がいるらしい。インド系の男が古めかしい二眼レフで写真を撮っていた。

ちょっと歩くがそのままテート・ブリテンに行くことにする。先日うっかりしていてブレイクを見ていなかったのだ。一九世紀初頭のイギリス人画家で重要なのはブレイクだけである。こういう世界を開いたのは、この人しかない。ミニチュアの銅版画に感心する。ブレイクの画技は、このエングレーヴィングの技術に裏打ちされていたのだった。ブレイクの線の異常な堅固さは、銅版画に由来するのである。

ラファエル前派も少し時間をかけて見た。ダンテ・ガブリエル・ロセッティのみがいささかの才能を感じさせる。ジョン・エヴェレット・ミラーは確かにうまい。しかし、「ミラーはラスキンの女房を奪った」とか愚にもつかぬ事を思い出す。エドワード・バーン・ジョーンズは仲間につきずられて参加してたんじゃなかるうか。まじめだが、ずいぶんお人好しな絵だ。ラファエル前派は御託宣は立派だったかもしれないが、技法がそれにつ

いて行かなかったように見える。

何となく漱石を思い出した。こういう趣味が流行っていた当時のイギリスで暮らすのはさぞつらかったろうと思う。そんなところで「漱狂せり」と噂されつつ文学について考えていたのである。文化の外発性を言いたくなるのも道理である。こんなものを有り難がるなんて、バカバカしいような気がしたのではなからうか。外に出たらとても暑かったので、ソフトクリームを買って食べる。子供みたいである。

×月×日

テートモダン二度目。しかし、現代物は一回勝負で、最初にピンと来なければ最後までダメなものだ。結局、先日印象に残った作品がやっぱりよい。

ポール・マッカーシーは汚いと思うが、つつい見えてしまう。イヤだけれど評価せざるを得ない。

ダン・フレヴィンの「無題―タトリンのために―」は好きな作品だ。ロシア構成主義のヴラディミール・タトリンへのオマージュ。一体にフレヴィンは白色光の作品がよいように思う。

セザンヌの「シャトー・ノワール風景」がある。ここ

からブラックやピカソのキュビズムまではホンの一歩である。そのブラックのキュビズム時代の素晴らしい作品「マンドリン」がある。

ジャクソン・ポロック、マーク・ロスコ、ロバート・マザウェルなどあるが、抽象表現主義も既に美術史の煉獄へ入っている。アーシル・ゴッキーが一点あった。抽象表現主義者ではゴッキーのみが、ホアン・ミロとシュルレアリズムの影響を引きずって痛々しい。アルメニア移民の彼は、芸術上の困難と貧苦に圧倒されて自殺した人である。

ヴォルスの作品を一点見いだす。本物を見るのは初めて。予想以上に美しく繊細だった。これはミニアチュア（細密画）的美しさである。ヴォルスはこんなに繊弱だったのか。これも痛々しい。ヴォルスはアル中だった。

ゴッキーやヴォルスの作品からは、生の痛みが伝わってくる。それは人間の受苦を代理しているように見える。芸術家であるとは何と苦しいことだろう。

×月×日

ハイゲート・セメトリーとケンウッドハウスを訪ねる。ハイゲートの古い墓は、繁った雑木林の中で蔭に覆わ

れ傾いている。その脇を二匹の狐が走り去っていくのが見えた。藪の小道を抜けると、一足先に入った東洋人の親子連れが「マルクスの墓ならここだよ」と親切に教えてくれた。僕が「マルクスの墓を見に来た」と受付で言ったのが聞こえていたらしい。礼を言って、大きな顔が乗っている墓の写真を撮る。ガイドに「スフィンクスライク」とあったが、確かに墓と言うよりは記念碑のようだ。

すぐ近くにあるG・エリオットの墓も見る。火葬ではないから「ここに眠る」とあるのがリアルである。エリオットが死んだ家はチェルシーを見た。これも何かの縁である。供養に何か読まねばなるまい（数日後、老舗の書店ハッチャーズで短編「The lifted veil」を買ってはみたが、果たして読み通せるか?）。

墓地を出て、ハムステッド・ヒースにあるケンウッド・ハウスに向う。ハムステッド・ヒースは、起伏の激しい雑木林とメドゥ（草地）からなっている。とてもロンドン近郊とは思えない。メドゥの草はもう黄色くなっている。秋の日差しに映えて、グールデンレトリバーの毛並みのように見える。野越え山越えケンウッドハウスに到着。目当てのレンブランドとフェルメールを見る。

レンブランドの自画像は晩年のものだが、これにはやや気取りが見える。いや、それは老いの空虚そのものかもしれない。フェルメールは、スナップショット性の強い絵で、若拙きの感がする。光がやや生ぬるい、というか、ピントが合っていない。しかし、これで生のフェルメールを三点も見たことになる。

となりのカフェで昼食。それから、ハムステッド駅に向ってヒースを横切ろうと歩き始めたが、どこをどう歩いているのかさっぱりわからなくなった。一人で野道を歩いていると、枯れた草むらからジージーとかすかにすだく虫の音が聞こえてくる。トンボが一匹、目の前を横切り、モンシロチョウが藪に沿ってフラフラと飛んでゆく。ポトンと音がしてドングリが落ちる。郷里の山道を歩いている気がする。ロンドンでそんな気分になるのも奇妙な感じである。ヒースをさまよひ、疲れ果ててやっと出口にたどり着いた。

×月×日

バッキンガムへブラブラ歩く。一応クイーンズ・ギャラリーが目当てである。着いてみると、レオナルド展をやっているではないか。あわててチケットを買って入る。

そうか、レオナルドの手稿はここにあったのだ。今まで所蔵先など気にも止めていなかった。「おお！ あの手稿ではないか！」というものばかり。頭蓋骨の切断図や腕骨の研究、馬のプロポーシオン、男の頭部やグロテスクなデッサンなどなど。赤チョークの繊細な線と色に驚嘆する。特に、「マドンナの頭部」と「聖アンナの頭部」が素晴らしい。なぜこれだけフェイントリーな筆遣いができるのだろう。

「男の後姿のヌード」は、まるでこの男の前面が白い虚空にめり込んでいるように見える。茫漠とした空間に直面して茫然としているかのごとくだ。宇宙の果てしなさに向って、「これは理解しきれない。どうやっても届きはしない」と自らの卑小に愕然としているようでもある。その意味で、これはレオナルドの精神的自画像だと言ってよい。

別室に入ったら、なんとフェルメールがある。フェルメールはなぜか一回で見るのが難しい画家である。というか、フェルメールだけを見るのでないと身に沁みない。それだけ集中を必要とする。

全盛期のレンブラントもある。ロンドンで見たレンブラントでは、ナショナルギャラリーの自画像を別とすれ

ば、これが一番いい作品かもしれない。この肖像画は商売になる絵だ。注文が殺到したのも当然だろう。衣服には高度なテクニクが施されている。厚塗りにグリザイユ（透明油彩）を加えるレンブラント独自の技法である。だが、その表情はテクニクを離れて、言いようのない精神性を宿している。レンブラントはここから晩年にかけて、そうした精神性の探求に向ったのである。ロンドンでレンブラントを何点か見て、それが実感できた。

×月×日

オックスフォード・ストリートの裏手にあるウォレス・コレクションを見に行った。数は結構あるが、多くはロココ調の作で私の趣味ではない。

一点あるフランス・ハルスが売り物らしいが、これは確かによい。ハルスがやる気になった時の作である。この人は気まぐれで、才筆に任せて殴り書きしてしまうような所がある。しかし、この作はよい物だ。ロココのものでは、ワトー、ブーシェ、フラゴナール、ランクレが充実している。ここにあるとは知らなかったが、フラゴナールの代表作「ブランコ」は非常にすぐれたもので、ロココ嫌いの私も率直に感動した。その才能を如実に示

す作である。結局、ここではハルスとフラゴナールの二点が見るべきものだろう。

ところで、ここに限らず、どのギャラリーに行っても、カナレットが結構ある。その人気ぶりは、ロンドンに来て初めて知った。これはイタリア旅行の記念絵葉書のよくなものだ。ゲーテに限らず、北方系ヨーロッパ人にとって、イタリアは憧れの地なのであろう。

まだ時間があつたので、ピカデリーの王立美術学院に行ったら、キルヒナー展だった。今の気分にはキルヒナーはつらい。大体、ドイツ表現主義絵画は好きではない。ここからノイエ・ザッハリヒカイトに連なる作品群は、忍び寄るナチスの足音が聞こえて来て、暗い気分させられる。

見るのはやめにして、近くを歩いてみる。オールド・ボンド・ストリートは、高級店が軒を連ねるせいだろうが、人通りはあまりない。さびれてしまった場所のようにも見える。

×月×日

家内が休暇を取ってロンドンに来たので、二人で四日ほどパリに行ってきた。パリには家内の友人夫妻がいて、

私も面識がある。奥さんが一日パリを案内してくれた。

その夜はボルドー出身の御主人も合流して、エッフェル塔近くの小さなレストランで夕食。シェフは以前J・P・ベルモンドのお抱えだったそうだが、如何にも下町風の小粋な店で、子羊のコンフィがとてもおいしかった。

ルーヴルの印象は意外に薄い。というのも、私をわざわざ見に行ったからである。私は「感心しに行って感心して帰ってくる」というのは嫌なのである。とは言うもの、レオナルドの「聖アンナ聖母子」が見られたのは眼福である。しかし、全体にルーヴルの絵画コレクションにはあまり感心しなかった。フランス中心主義で、その夜郎自大の匂いに反感を感じてしまうのである。

コレクションとしてはオルセーがよい。やはりマネ、モネ、セザンヌ、ドガはすばらしい。本当にすばらしい。ルドンが見られるのも有難い。しかし、玉石混淆の美術館ではある。展示しなくてもいいような作品がありすぎると思う。

×月×日

ウォルサムストウにあるウイリアム・モリス・ギャラリーを訪ねた。駅は地下鉄ヴィクトリア線の北の終点で

結構遠い。そこから一五分以上歩く。モリスが子供の頃住んだ家だという。父が成功者だったというだけあって確かに大きい。展示ルームは四部屋ほど。内容にあまりまとまりはないが、ケルムスコット・プレススの板木など面白かった。寺院のファサードを描いたラスキンの細密なデッサンがあった。知性と忍耐力だけで描いたインテリ臭いものである。こういう奴は嫌いだ。

モリスによれば、ウォルサムストウは「昔はよかったが、今は下町化して (cocknified)、安普請の家ばかりになった」ので、出ていったのだそうだ。周辺の雰囲気は確かにモリスのイメージに合わない。尤もモリスが社会主義者だったというのも、しっくりこない話ではある。ギャラリーの裏の公園を歩く。老人達がベタンクをやっていた。小さな花壇の配色に感心する。モリス模様の淵源が何となくわかったような気がした。

夕方、ヘレンが音楽評論家の横溝亮一氏を紹介してくれ、カフェで歓談。フィンランドの音楽祭に招待された帰りで、「四日間シベリウスばかり聞かされて少々閉口しました」と笑っておられた。ロンドンではショパン関係の資料を見ておられるとのこと。白髪の美しい奥様と子ども高雅な御夫妻であった。日本にいたらお目にかか

ることもなかったろうが、これも合縁奇縁である。

×月×日

ブラブラとセント・ジェームズ・パークまで。水鳥を眺めながらコーヒーを飲む。私はこのパークが一番好きだ。それからウエストミンスター橋を渡って、サーチギャラリーへ。少し先のロンドン・アイは相変わらず長蛇の列である。

ギャラリーはデミアン・ハーストをフィーチャリングした展示。例のホルマリン漬の牛や鮫や豚・羊がある。こけおどしでもあるが、悪くはない。ハッターリが利かないと商売にならないのが現代美術の世界である。

ドウェイン・ハンソンの蠟人形が何体か置いてあって面白い。森村泰正の作品もある。森村が世界美術市場で通用しているのを実感。リチャード・ウィルソンのオイルの部屋は、基本コンセプトは原口雅之の方が早いと思う。少々愛国の情に駆られた。

一体にイギリスの作家は、今昔を問わず、人体及び死体に興味があるように見える。ポートレイトや蠟人形や剥製好きの伝統が脈々と流れているのであろう。それ可言えば、日本人作家は陶芸家的、工芸家的である。つま

り、仕事がこちんまりしていて小綺麗だ。

夜、スコットランドを友人夫妻と車で回ってきた義父母と落ち合って、「シン普森ズ」で夕食。老舗のローストビーフはさすがに腹にこたえた。

×月×日

ケンブリッジのフィッツウィリアム博物館に行った。

ここにはW・ブレイクが一〇点ほどある。あとは、O・ギボンズやW・バードなどの曲を収めたフィッツウィリアム・ヴァージナルブックという有名な楽譜があって、私の好きなドメニコ・スカルラッティもこれにしか収められていない作品が数曲ある。展示はないかもしれないが、それがあつた場所に来たと思っただけでも楽しい。

ところが、博物館の半分が工事中で、そのどちらも見られなかった。これも縁である。縁は無理に求めるものではない。そのかわり、予想外だったが、セザンヌやピカソ、モディリアニなどのよい作があつた。特にセザンヌの初期作品「陵辱」はここにあつたのかと驚いた。後年の「大水浴」シリーズにつながるセザンヌの官能への嗜好を示すものである。古い絵画は大したことはない。埋め草に、御当地イギリス群小画家の肖像画などがある。

早々に出て、近くのパブで昼を食べ、街をブラブラしたあと、夕方前に帰ってきた。わざわざ半日かけてケンブリッジまで何しに行ったかよくわからないようなものだが、私にはこういう方が何となく面白い。花田清輝の所謂「好機を爪弾きにする」という奴である。うだつが上がないのも道理である。

×月×日

リヴァプールに行く。顔見知りのKさんの所に二晩泊めてもらった。初日は、ビートルズゆかりのキャヴァー・クラブ前で記念写真を撮ったり、リヴァプールFC公式ショップで買物したりで、全くのミーハーであつた。

翌日、イギリス国教会のカテドラルを見物。設計はサー・ジャイルズ・ギルバート・スコット。彼はロンドン名物の公衆電話ボックスの設計者である。気を引かれて写真を撮ったバタシーの発電所も彼の設計だという。確かにそれらに共通性はあるようである。優れているというのではない。極めて鈍重な建築だ。ただ、それがその時代の雰囲気を見せているように思える。

アルバート・ドックにあるテート・リヴァプールでは、ポール・ナッシュやキネティックアートの企画展を見た。



どちらもローカルな感は否めない。しかし、ファーストフロアのコレクションがよかった。思いもかけなかったが、セザンヌの「庭師ヴァリエ」に出会えた。これはセザンヌが晩年に到達した、その画業の極点とも言うべき作品である。この絵は人生をまっとうした老芸術家のみが辿り着けるものだ。学んで至りうる範囲にある絵ではないし、学ぼうとすべき物でもない。ただ愛で言祝ぐべき絵であるように思う。庭師ヴァリエが安心立命と静謐の中に腰掛けているように、このセザンヌは安らいでいる。

そのほか、マチスの自画像、モンドリアンの初期作、新古典主義時代のピカソなど、すばらしい作品がいくつもあった。テート間で作品の行き来があるのかもしれないが、リヴァプールでこうした作品を見るとは思わなかった。いきあたりばったりの旅行の面白さである。

その夜はKさんの友人達と、パブを二軒回ったあと、ヨーロッパ最古という中華街に行つて、Kさん行きつけの店の中華料理で満腹。

×月×日

ストランドのコートールドギャラリーに行く。

ブリュッゲルの小品が二点あって、とてもよいものだ。初めて知るルーベンスの「月夜の風景」は雰囲気がいい。優美な人柄がよくわかる。ここにはルーベンスによるラファエロの模写もある。ルーベンスはレオナルドの「アングアリの戦い」も模写している。才能は無論だが、意外に努力の人である。ティエポロの小品も何作かあって珍しい。

このギャラリーは、しかし、近代絵画がいい。マネの名作「バー・フォリー・ベルジュール」が見られる。この作は昔から好きな作である。女の表情がはかなげで美しい。「近代の憂愁」と言うべきか、何かせない気のある絵だ。マネがその肖像を描いてもいるベルト・モリゾの作品もあった。美人薄命的な雰囲気のある絵である。

ドガの素晴らしいパステル「体を拭く女」がある。ナショナルギャラリーのものと甲乙つけがたい。パステルでは、やはりマネ、ドガ、ルドンの三人に留めを刺す。それにしてもドガは不思議な画家である。素晴らしいデッサン力を持ちながら、彼がその画業を完成させたのは、晩年のパステルにおいてだったと私は思う。つまり、ドガは、器用貧乏を乗り越えて見事に成熟した画家なのだ。セザンヌが十点ほどあって、充実している。「サント・

ヴィクトワール山」は、木の枝を上部に配したヴァージョンで、このシリーズの中では最もまとまった、というか、何が描いてあるかわかりやすい絵である。その他、「トランプをする人」「パイプをくわえた男」「石膏像のある静物」など傑作がそろっている。セザンヌの面白さは無類である。たぶん、絵画空間の体験がリアルだからだろう。見る者は絵に何が描いてあるかではなくて、絵の中の空間を、つまり、事物によって構成され複雑な凹凸に満ちた世界を自分で感じるのである。セザンヌは、事物を描いたというよりも、事物を空間の側から描いたのだ。

夜更けにキッチンの窓辺でタバコを吸っていたら、プラタナスの葉陰から銀色の満月が見えた。

あまのはらふりさけ見ればロンドンのチェルシの街に出でし月かも。

×月×日

もうすぐ日本に帰る。何度も通ったナシヨナルギャラリーも、これが最後である。ペンヤミンが『複製技術時代の芸術』を書いてから一世紀近く立つが、私は改めてオリジナルの持つアウラに打たれた。多くは十七世紀以前の作品ばかりである。特に、聖アンナカルトンの前で

は、しばしばそのアウラを全身に浴びている感じに捕らわれた。画面が部屋の中に滲み出して、私がそこに含まれてしまう稀な瞬間が訪れるのだ。

セザンヌやドガも素晴らしかった。しかし、それは私にとって何か観念的な水準の出来事のようにも感じられる。近代絵画とは、アルチザンからアルチストへの画家の変身物語でもあったのだろう。私は近代を呪詛するものではないが、しかし、我々はそういう生活にずいぶん疲れてしまったようでもある。

今日は、なじみになった作品に別れの挨拶をするつもりだった。しかし、私は今日もその絵の前でしばし立ち止まり、また立ち去っていくに過ぎなかった。私がいなくともこの絵はそこにこうしてあるだろう。そのことが、私にとつてあたかも私自身の幸福であるかのように感じられる。ARS LONGA VITA BREVIS.

レオナルド、ファン・アイク、ベラスケス、プリューゲル、ホルバイン、ボッシュ、レンブラント、フェルメール。もう会うことはないかもしれない。西洋絵画のピルグリムを志すほど私は趣味人でも旅行好きでもない。たまたま会えてよかった。無理に会おうとは思わない。私は遠く離れてしまった懐かしい人の写真を眺めるように、

その似姿を時に取りだしては眺めるだろう。

(110011・11・10)